

氏名(本籍)	よし だ しん や 吉 田 真 哉 (群 馬 県)		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 甲 第 5220 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	対話の意味 －ヴァイマル期におけるヤスパース哲学の形成と展開－		
主 査	筑波大学教授	文学博士	笹 澤 豊
副 査	筑波大学教授	文学博士	伊 藤 益
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	桑 原 直 己
副 査	筑波大学講師	博士(文学)	千 葉 建

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、ヤスパースの哲学における実存的交わりの概念の考察を通じて、対話の意味を解明することを主題としている。実存的交わりの概念は、実存哲学の内容を初めて詳細に展開した三巻本の著書『哲学』(1932年)の公刊以来、ヤスパースの哲学における主軸のひとつとして提示されている。しかしこの著書で実存哲学の立場を提示する以前においても、ヤスパースは、他者の意味を見すえながらこの実存的交わりをめぐる問題を考慮していた。それゆえ『哲学』以前に公刊された著書である『世界観の心理学』(1919年)への考察が、実存的交わりに関して踏み込んだ考察を行うために必須の作業となる。こうした理解の下で、本論文はこの実存的交わりの概念の解明を、他者との対話的関係の場面に絞って行い、これを通じて対話の意味を論究しようとするものである。

本論文は、序論に続いて、第一章「実存哲学の基本的問題」、第二章「哲学の定義をめぐるリッカートとの対話」、第三章「実存哲学の方法をめぐるハイデガーとの対話」、第四章「大学における哲学の活動」、第五章「他者との交わり」、第六章「実存的交わりの問題性」、第七章「倫理への問い」、そして結論からなる。各章の概要は次の通りである。

まず著者は、第一章において、ヤスパースの実存哲学の基本的立場を確認する。それによって著者は、ヤスパースが実存哲学を樹立する以前から一貫して取り組んできた問題の中心点を摘出し、この中心点が自己の生成の問題であったことを明らかにする。こうしたことから、著者は、実存哲学を樹立する以前においても、ヤスパースが自己の生成の問題に向き合っていたことは明らかであるとする。

第二章では、著者は、ヤスパースが実存哲学を樹立した理由について論究する。自己の生成の問題がヤスパースの一貫した問題関心であったとすれば、なぜ彼は実存哲学を標榜することになったのか。この問いについて、著者は、論敵に対して自身の立場を防衛するために、ヤスパースは実存哲学を標榜することになったとしている。著者によれば、実際の論敵に直面して、ヤスパースは自身の立場を鮮明にさせる必要に迫られたために、実存哲学という立場を標榜したのである。この論敵はリッカートであったとする著者は、ヤスパースとリッカートとの間でどのような論争がくりひろげられたかについて詳述する。

第三章では、著者はヤスパースとハイデガーとの間でなされた対話に焦点を当てている。ハイデガーは実

存哲学を樹立するために必要な方法論上の手続きをヤスパースに対して助言したが、この方法論上の手続きは著者によれば実存哲学の歴史の我有化である。この助言をヤスパースがどのように受け入れたのか、それを解明するのが本章の主題である。

第四章では、著者はヤスパースがそもそも交わりの概念をどのようにして打ち出したかを解明しようとする。著者によれば、ヤスパースは当初、交わりの概念を、大学における対話の実践として構想していた。大学における対話は討論と議論に区分される。討論は第三者も参与できる対話であるが、これに対して議論は、基本的には当事者のみで遂行される対話である。このように討論と議論を区分したとしても、しかしヤスパースはこの区分に二項対立的な価値判断を結合させることはせず、第三者も参与できる討論にも一定の価値を認めている。このことから著者は、対話が遂行される場合はヤスパースにおいては、必ずしも閉鎖的なものとは考えられていなかったとする。

第五章では著者は交わりの概念についてさらに検討を重ね、ヤスパースが交わりの概念を、現存在の交わりと実存的交わりに区別したことに着目する。現存在の交わりが自己の生成をうながすことのない他者との関係を意味するのに対して、実存的交わりが自己の生成をうながす他者との関係を意味することから、著者は、実存的交わりにおいて自己の生成は、代替不可能な他者との関係として実現するとしている。

第六章では、著者は、実存的交わりの問題点をめぐって詳細な考察を展開している。実存的交わりの問題に関しては、実存的交わりを結ぶ他者が代替不可能な者であるために、この関係は閉鎖的な場面においてしか成立しないのではないか、という批判的見解が従来提示されてきたが、第四章の考察を踏まえて、ヤスパースの実存的交わりの概念は必ずしも閉鎖的な状況だけを指示しているわけではないとする著者は、この主張を補強するための論拠を提示すべく、バイトマンらの先行研究に依拠しながら、綿密な考察を展開している。

第七章では、著者はヤスパースの実存哲学における倫理の問題について論究する。実存哲学を樹立するに当たって、倫理の問題を主に当為の問題として考察するヤスパースは、当為の要求という場面で、実存的交わりを想定している。しかし実存的交わりか親密な者としか結べないのであれば、この当為は偏狭な判断におちいってしまう。だが実存的交わりが疎遠な者とも結べるのであれば、この当為は限りなく公平な判断に支えられる、とする著者は、実存的交わりを結ぶ他者が疎遠な者でもあるとする本論文の解釈は、ヤスパースの実存哲学における倫理的意義を明らかにする研究にとって必須の前提となると述べる。

以上の考察から、著者は結論として次の見解を提示している。第一に、対話という事態の十分な考察のためには、対話の相手がだれであるのかという具体的問題への視点が必要であること。第二に、対話が遂行される場面は、親密な者だけに限定された閉鎖的な場であるより、むしろ疎遠な者も参与できる公共的な場である方が望ましいこと。自己の生成が望ましい方向へと進むためには、疎遠な者の意見にも耳を傾ける態度が保たなければならないと著者は言う。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ヤスパースの実存的交わりの概念の分析により、ヤスパースの哲学の根本にある重要な諸概念を明らかにすることに成功している。本論文において特に高く評価できるのは、次の二点である。第一は、論述が具体的で理解しやすいことである。ヤスパースが差し出す実存哲学の諸概念は抽象的で難解であるが、本論文は、それらを具体的に現実的な対話の場面に置き入れることで、これらを十分に咀嚼し、明確な概念へと再構成している。第二は、解釈が独創性を有していることである。ヤスパースに関する従来からの先行研究を見た場合、彼の思想とナチズムとの関係を考慮しつつ、彼の哲学を擁護する見解はまだ見られないが、その中であってこの見解を詳細な議論を踏まえつつ提示した本論文は、その独創性によって斯界に裨益するものと期待できる。

しかし、本論文にも不備な点がないわけではない。著者は実存的交わりを、実存と理性との相補的關係において遂行されるものとして特徴づけるが、理性に関する論述が不十分であり、この概念に関する掘り下げも不足している。実存と理性の關係はヤスパース哲学全般にかかわる重要な問題である。この問題に取り組むには、考察の範囲をヴァイマル期に限定せず、中期以降の『理性と実存』、『哲学的論理学』等の著作にまで広げることが必要である。

以上のような問題点があるとはいえ、著者の具体的な視点と広範な学識に基づく本論文は、論理の展開が非常に緻密であり、その構成の細部にまで考察が行き届いている点で高く評価されねばならない。従来の先行研究を十分に踏まえながら丹念に議論を展開している点も高く評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。